

語の意味・用法のゆれと意味変化

——博多方言「しろしい」の場合——

陣内正敬

キーワード：博多方言・感情形容詞・しろしい・意味のゆれ・意味変化

要旨

博多方言のネイティブ62名について、博多方言シロシイ（ある不快感を表す多義語）の意味・用法を25項目の例文によって調査した。その結果、まず現在の博多にはこの語の使用頻度とその用法の広さにおいてピークに達している世代（40代後半～60代前半）と比較的狭い用法のピーク前世代、廃用化に向かうピーク後の世代のあることがわかった。さらに使用頻度と用法の広さに関して個々人で大きく相違しているものの、誰もが用いている用法と、そうでないもののあることがわかった。つまり、シロシイを集団語レベルで見た場合、中心的用法や周辺の用法と言えるものがやはり有り、シロシイの集団語としての意味構造がわかった。

またシロシイの意味・用法の世代的揺れから意味変化の要因を考察したが、方言接触や共通語化と言った外的要因の他に、上の世代とは違う自分達の世代の独自性を積極的に示すという社会心理的かつ集団内的な要因のあることも伺えた。

1 はじめに

ある地域方言に限ってみても、語の指し示す意味というものは厳密に言えば一人一人違っている。特にその語が多義語でありかつその使用頻度に関して世代的差異がある場合には、その語の意味用法に関して世代ごと、あるいは個人ごとの揺れが大きくなると考えられる。国立国語研究所（1964：54）によれば、使用率の高い語ほど、その語の持つ語義の数も多いという。これは雑誌を調査対象としたものであり、いわば書き言葉のレベルにおける結果である。また池上（1978：162）では、多義語の消失とは、いわばその語義の数がゼロになってしまったものという捉え方をしているが、これも使用頻度と語義の数の関係を暗示する意見である。

一方、ある地域集団を取った時、使用頻度に揺れが見られる語について、その語の意味・用法はどのように揺れているであろうか。ある集団でその語が機能していくためにはその語の意味に関して各人の共通の認識がなければならぬのは当然であり、その意味ではたとえその語が消失途上にあっても、ある程度定まった意味に収束して行くことも考えられる。

小論は集団語レベルにおける語の意味用法の揺れを観察することによって、その語の集団語としての中心的意味、周辺の意味などを探り、またその揺れを世代差という観点から

眺めることによって意味変化の様相ならびにその要因を考察する。したがって、従来よく行われてきた個人語レベルでの部分体系の意味記述ではなく、集団語文法的一端を明らかにすることが目的である。対象となった集団は福岡市の都心部（博多区、中央区）に生活する博多方言話者。対象とした語は「シロシイ」という博多方言である。

2 個人語レベルにおける「シロシイ」の意味・用法

まず個人語レベルでのシロシイの意味用法を記述し、その後集団語レベルでのその揺れに言及していきたい。

予備調査として、シロシイを最もよく使用していると思われる世代数人に面接調査をした結果、その使用頻度と用法の広さにおいて最も抜きんでていた YN 氏のをここで簡単に解説する。YN 氏は、1925 年福岡市博多区生まれの生え抜きの女性。氏のおばあさんの代からずっと当地であり、また御主人も同じ博多区出身ということであり、氏の内省報告は十分に信頼のおけるものである。

シロシイはまず西尾(1972)の形容詞の分類に従えば、ある種の不快感を表す「感情形容詞」と言える。つまり“人を主語に取りえて、かつ言い切りの平叙文では発話者しか主語になりえない”(例文(1)と(4))と、“当該の形容詞の後に「こと」を続けることができる”(例文(2))という条件をみす。また氏の内省では“体の一部分を主語にすることができる”(例文(3))ことから、西尾(同)の言う感情形容詞の下位区分としての「感覚形容詞」でもありうる。以下の例文(1)～(4)を参照。なお以後、方言文は漢字カタカナ混じり書きにし、()内はおおよその共通語訳とする。またアスタリスクは非文を表すものとする。

(1) 雨が降ッテ シロシイ (うっとうしい)

(2) 町内会長ヤラ (など) ナッタラ シロシイコトガ (面倒なことが) イッパイアル

(3) メボ (ものもらい) ガデキテ 目が シロシイ (すっきりしない)

* (4) コノ子ハ オシメガ濡レテ シロシイ (気持ち悪い)

ただし、(4)で シロシカロー (気持ち悪いだろう) は可能である。

さて一般に、ある感情と言うものはある刺激があつて初めて生じるものである。そこでシロシイの意味用法を記述するに当たって、シロシイというある種の不快感を催させる刺激の質、あるいは種類という観点からそれを分類しようと思う。この考えはおもに国広(1986)に展開されている多義語の記述方法にヒントを得たものである。

(A) 外界のものを人間の感覚器官で受け取る刺激：

(A 1) 一般的にシロシイとは関わりが薄い。特に味、においなどとは結び付かない。聴覚、視覚などは例文(5)、(6)などで言わないこともないが、それほどピッタリと来ない用法である。

(5) アゲン (あんな) 泣キ声 聞イタラ シロシュウナルネ (気が重くなるね)

(6) シロシイ (やほったい) 格好

(A 2) ただし、雨に濡れそれが服に染み込んで不快な状態や、赤ん坊がオシメを濡らし不快

(14) 語の意味・用法のゆれと意味変化

がっている様子にはシロシイがよく当てはまる。つまり水気の関わった皮膚感覚は数あるシロシイの用法の中でも典型的なものであり、最もよく使われるもののひとつである。

(B) 身体内から生じる生理的刺激：

例文(7)～(10)のような様々な体調の不調に対して使われる。これらの刺激はがまんできる程度のものであるが、連続的、周期的であるためしつこく感じられる。

(7) 虫歯ガウズイテ シロシイ (つらい)

(8) 切開手術ノアトデ シロシイ (つらい)

(9) 鼻水バツカリ出テ 鼻ガ シロシイ (すっきりしない)

(10) 二日酔イデ 朝カラ シロシイ (体がすっきりしない)

(C) 思考、精神作用の結果としての刺激：

(C1) 何らかの理由で自分の体が思うようにならず、動作の障害となる場合。これは前項の体内刺激との連続性を感じさせるが、こちらはあくまでも動作、行為の想像ないしその経験という点で異なっている。

(11) 眼鏡忘レテ シロシイ思イシタ (困った)

(12) 松葉杖生活ハ ドコ行クニモ シロシイ (面倒だ、やっかいだ)

(C2) したくないことではあるがしなければならない状況にあり、しかもその行為の実現がかなりの程度可能である際の抑圧感。(C-1)が身体的障害であったのに対し、これはやりたくないという心理的障害である。

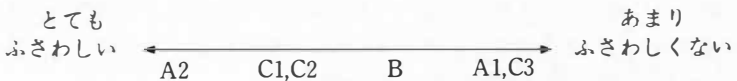
(13) コゲン (こな) 雨ノ夜ニ 配達ヤラ (なんか) シロシイ (したくない)

(14) シロシカロー (大変でしょう) パッテン (けど) オ願イシマス

(C3) 動作、行為の関わらない感情：

(15) シロシイ (陰気でおもしろくない) 人

さて、以上分類した用法はそれぞれ使用頻度が違うし、またシロシイと言うのにぴったりするものからそれほどでもないものまで段階が見られた。これは質問文を呈示した直後のYN氏の反応によっても伺い知ることができた。そこで上記の分類に対して、ふさわしさの程度を判断してもらった。つまり個人語レベルでの中心的意味、周辺的意味を尋ねたのである。最もふさわしいものから順に並べると次のようになる。



3 集団語レベルでの「しろしい」の意味・用法

一体、ある地域方言話者が有するある方言形の意味用法は、その人が属する地域集団の他の構成員にどれくらい共有されているものであろうか。特にその語の使用頻度がその集団内部で揺れている場合はどうであろうか。前節で記述したシロシイは現在では消失途上にある語であり(陣内(1985)など)、この語の集団レベルでの調査はこの疑問に答える意味で

興味深い。

3-1 調査の概要

博多方言話者の老年層（最高齢78歳）から少年層（最年少12歳）まで計62名にシロシイの用法に関するアンケート調査を行った。（インフォーマントの年齢については表2を参照）。調査時期は1989年6月から10月にかけてである。語の意味用法に関する質問であるため、調査は原則として筆者自身が聞き取る面接方式で行った。調査項目は前節で述べた各種の用法をもとに、表1のような25の質問文^{注3}を作成した。この例文はYN氏は全て言うとしたものである。

各質問文に対して次のような数値で評価を求めた。話者自身がそのような使い方をすれば‘2’、自分はしないがその文が不自然でなければ‘1’、質問文のような使い方が不自然であれば‘0’。このうち‘1’の評価については、インフォーマントがどのような意味に受け取っているか知る意味で共通語訳を言ってもらい、さらにシロシイに代わる使用語彙を聞いた。

表1 質問文

<1>アゲン泣キ声聞イタラ シロシュウナ ルネ	<14>メボノデケテ シロシイ
<2>ポタリポタリ雨漏リノシテ シロシイ	<15>ハエカブツテ アンタ シロシカロウ モン
<3>アノ人 シロシイ格好 シチャーネ	<16>鼻水ノ出テ 鼻ノ シロシイ
<4>雨ニ濡レテ シロシカロウ	<17>昨日手術シテ 動ケンデ シロシイ
<5>ソゲン汗カITE 早ウ着替エナ シロ シカロウ	<18>眼鏡忘れて シロシイ思イタ
<6>コノ子ハ オシメガ濡レテ シロシカ ロウゴターネ	<19>虫歯ノ痛ウシテ 食ベラレンデ シロ シイ
<7>梅雨時ハ ベタツイテ シロシイ	<20>松葉杖生活ハ ドコ行クニモ シロシ イ
<8>近頃ハ 雨バツカリデ シロシイ	<21>結婚式場ニ 着クマデニ 濡レロウネ コリヤ シロシイバイ
<9>虫歯ノ ウズイテ シロシイ	<22>コゲン遅クニ 配達ヤラ シロシイ
<10>風邪気味デ 頭ノ シロシイ	<23>オ梅ヤミニ 行クター シロシイ
<11>切開手術ノ 傷ガ痛ンデ シロシイ	<24>離婚話ター シロシイ話ヤネ
<12>今年の風邪ハ シツコウシテ シロシ イ	<25>アノ人ハ シロシイ人ヤケン 会イト ウナイ
<13>昨日酒バ飲ミ過ギテ 朝カラ シロシ イ	

なお以下の分析に用いるデータは、調査した62名中、質問文に対する評価で‘2’が少なくともひとつはあった40名に限っている。これはシロシイが理解語彙に過ぎない話者の内省は、信頼性に欠けると判断したためである。

(16) 語の意味・用法のゆれと意味変化

表2 回答一覧(総和の高い順)

順位	性	年齢	用 法 (質 問 文)																									総和 (得点)
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
1	F	64	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	50
2	M	63	1	2	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	47
3	M	55	2	1	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	47
4	M	54	1	2	2	2	2	2	2	2	1	2	1	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	46
5	F	21	2	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	46
6	M	60	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	45
7	F	55	2	1	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	1	45
8	M	49	2	2	1	2	2	2	2	2	0	1	1	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	44
9	M	48	1	2	1	2	2	2	2	2	0	1	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	44
10	F	48	1	1	1	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	44
11	F	45	2	2	1	2	1	2	2	2	1	1	1	2	2	2	2	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	43
12	M	42	0	0	1	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	1	1	41
13	F	78	1	2	0	2	2	2	2	2	1	1	1	2	1	1	1	1	2	2	2	2	2	1	1	1	1	36
14	M	51	2	1	2	2	2	2	2	2	0	0	0	1	1	1	2	1	0	1	1	2	2	2	2	2	2	35
15	F	16	0	1	0	1	1	2	2	2	2	0	2	2	2	2	2	0	2	2	2	2	2	0	2	1	1	35
16	F	17	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1	1	1	1	33
17	M	78	0	1	1	2	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	1	1	0	32
18	M	36	2	2	0	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	2	2	2	1	1	0	32
19	M	71	0	0	0	2	0	2	2	2	2	0	1	1	1	2	1	2	1	0	2	2	2	2	2	2	0	31
20	M	70	0	0	0	2	1	2	2	2	2	0	2	1	1	2	1	0	1	0	2	2	2	2	2	2	0	31
21	F	60	1	1	0	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	2	2	1	1	0	27	
22	M	43	1	1	1	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	0	1	0	27
23	F	33	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	2	1	1	1	1	1	27
24	M	30	0	1	0	2	1	2	2	2	1	0	0	1	0	2	1	2	0	0	1	1	2	1	0	1	2	25
25	M	28	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	24
26	F	25	1	0	0	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	24
27	F	17	0	1	0	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	0	0	0	1	2	2	1	1	1	24
28	M	35	0	1	1	1	1	1	2	2	1	1	0	1	0	1	1	1	1	0	0	1	2	1	1	1	1	23
29	F	33	1	1	0	2	1	1	1	2	1	1	1	0	0	1	1	1	0	1	0	1	2	1	0	1	0	21
30	F	17	0	2	0	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1	21
31	F	24	1	2	0	1	1	2	2	2	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	1	2	1	1	1	1	20
32	M	19	1	1	1	2	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	20
33	F	26	1	1	1	2	1	1	1	2	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	18
34	F	21	2	1	0	1	0	1	1	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	1	1	1	18
35	F	16	0	2	0	2	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	1	0	1	15
36	M	20	1	1	0	2	1	1	2	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	14
37	F	16	0	1	0	0	1	0	1	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	13
38	F	37	0	0	0	2	1	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	12
39	F	50	0	0	0	2	0	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	9
40	F	27	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3

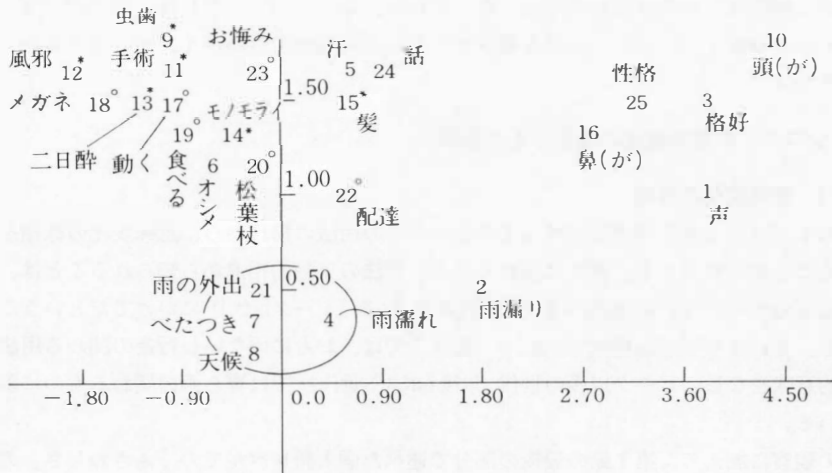
3-2 データの集計結果と考察

表2は各人の回答を総和(以下「得点」)の大きい順、つまり使用する用法の広い順に並べたものである。集団レベルで見た各用法間の違いに注目すると、用法によっては得点の低い者にも割合根強く用いられているもの(用法4, 7, 8, 21など)と、高得点者のみに使われているもの(用法3, 10, 16, 25など)、あるいは両者の中間に位置するものなど、用法ごとの盛衰が見られる。これはシロシイを集団語として見た場合にも、やはり中心的用法と周辺の用法あるいは例外的用法のあることを意味している。

この印象をもう少し客観的かつ正確に知るために、前記の40名のデータを林の数量化理論3類にかけてみた。その際、3-1で述べた3種類の評価を使うか使わないかという2種類に置き換えた。つまり表2の2を1とし、1と0を0として処理した。下の図はその結果である。プロットされた数値は質問文(表1参照)の番号を示している。

やはり、使用者を多く持つ用法ほど中央付近に集まっており、それらは集団語として見た場合の中心的用法と見なすことができる。それらは<4> 雨に濡れることの気持ち悪さ<7> 梅雨時のべたつき不快さ、<8> 雨続きの天気のうちとうしさ、<21> 雨の日に外出しなければならぬ時の気の重さなど、いずれも「雨」が「しろしさ」の原因になっている用法である。しかしながら同じ「雨」が関与するものでも、<2> 雨漏りの音自体に「しろしさ」を感じることはそれほど一般的ではない。もし雨漏りのために、夜中寝ている時などにバケツを置きに行かなければならぬ状況となればシロシイがびったり来るという報告が多かった。つまりしたくない行動が関わって来ればずっと一般的な用法になるのである。また<5> 汗のべたつきによる不快さ、<6> オシメが濡れている不快さなども水気の関わる皮膚感覚の不快感という意味では「雨」の関わる場合と同じであるが、前4者のような中心的用法とは言えないところに配置されている。これは次のように解釈されるであろう。

<6>については、快適さが追求される現代においては赤ん坊のオムツも例外ではなく、紙オムツの普及などでその状況そのものが少なくなった。従ってその不快がっている様を



(18) 語の意味・用法のゆれと意味変化

イメージする力も弱くなったと言える。老年層に昔はよく使ったという報告があった。このことに加えて、回答者の中にそういう場に居合わせる機会のほとんどない者も含まれていることも関係があるだろう。〈5〉汗は尿と同じ性格の皮膚で受け取る不快感であるが、汗をかくのは一般には運動した後や、暑い晴天の時などであり、この解放的なイメージが陰にこもったイメージのシロシイとは合致せず、〈6〉よりも周辺の用法になったと推測される。

一方、図の周辺部に位置する〈10〉風邪気味で頭が重い感じや、〈16〉鼻水が出て鼻がすっきりしない感じはいずれも体内から来る生理的不快感であり、その意味では図の中央上部の集団の中に入り込むはずのものである。この両者が非常に一般的でない用法となって現れたのはおそらく次のような事情による。質問文〈10〉や〈16〉は他の生理的不快感を表す〈9〉、〈11〉、〈12〉、〈13〉、〈14〉、〈15〉などとは異なって、〈10〉では「頭」が、〈16〉では「鼻」がその文の主語となっている。つまり「体の一部分が主語となり得る」かどうかをテストするための文だったわけである。結果は第2節の記述の資料となったYN氏などごく一部の人のにとっては西尾(前掲)の言う「感覚形容詞」の資格も併せ持つと言えるが、集団語として見た場合には「感情形容詞」と考える方が妥当と言えることになる。

次に図の中央上方の集団には生理的、動作的、精神的な様々の刺激が含まれておりこれらは明瞭に区別されない。これは刺激自体が単一のものと決め難いことにも起因しているだろう。たとえば〈18〉眼鏡を忘れたために物がよく見えずに困ったという感情は、裸眼ではよく物が見えないという体の生理的状态と物を見るという行為が同居した刺激と取れるし、また〈19〉虫歯があって物が食べられないからつらいという感情も同様であろう。しかしながらある弱い傾向は伺えそうだ。数値の右肩に*を付けたのは身体生理的刺激に関わる用法、○を付けたのは動作、行為に関わるものである。一体に後者の方が前者より一般的な用法と判断される。

最後に第2節(C3)で述べた〈3〉人の格好、〈24〉話、〈25〉人の性格などが関与する抽象的な感情は、かなり特殊な用法となっている。ただ〈24〉がそれほど周辺のでないのは、そのシロシイ(やっかいな)話を解決するための何等かの行為がイメージされるからであろうか。

4 シロシイの意味変化の様相とその要因

4-1 意味変化の様相

これまで述べてきた集団語レベルでのシロシイの用法の揺れから、意味変化の様相を推測することが可能である。表2に現れている、用法の年齢的相違から知られることは、用法の広さのピークは、40代後半から60代前半(以後「ピーク世代」)にかけてだということである。それより以前の世代(以後「プレ世代」)では、おもに雨なし行為の関わる用法が中心的意味をなし、ピーク以後の世代(以後「ポスト世代」)では専ら雨の関わるものに限られている。

この観察に加えて、第1節の最後の部分で述べた個人語レベルでの「ふさわしさ」の程

度に関する各用法間の相違、並びに前田(1982:42)、山口(1982:209)などに見られる、感覚形容詞が感情形容詞として比喩的に転用されるという意味変化の方向性などを考慮すれば、シロシイの意味変化の様相は次のように推測されるであろう。

まず、雨が関わった皮膚感覚上の不快感から出発し、それが雨に限らず水気に関わった皮膚感覚の不快感や、さらには雨のためにある行為がすんなりできない場合などにも拡大転用された。さらに、ピーク世代においては、体内から発する生理的不快感や、思うに任せない身体の動作、気の向かない行為一般へ拡大転用された。転用がピークに達した後は急速に意味用法が縮小し、再び雨の関わった不快感へと収束して行った。これらは表2のポスト世代の反応を見れば明かであるし、このデータから除かれた22名の反応からも、「1」(自分は使わないが、意味はわかるし自然である)がこの用法に集中していたことからこのことが伺える。

4-2 意味変化の要因

シロシイの意味変化の要因を考察するには、まずピーク世代とプレ世代間の相違と、ピーク世代とポスト世代間の相違に分けて考える必要がある。

(1) プレ世代からピーク世代へ

ここはシロシイの意味用法が拡大転用されたケースである。プレ世代では、「1」と回答のあった項目には、使用語彙として、オージョーシトル、オージョーコイトル(困っている)、ヤオイカン(大変だ)、ウットーシカ(うっとうしい)、シタムナカ(したくない)などが見られる。シロシイを狭い意味で使っているプレ世代にとっては、ピーク世代の“新用法”はシロシイの過剰使用であり、一種の「ことばの乱れ」と映っている。しかし当のピーク世代にとっては何でもシロシイで片付けることは一種の世代的流行であり、それがその世代のスタイルなのであり、むしろ自分たちより上の世代との違いを積極的に出そうとした結果なのだと思われる。

(2) ピーク世代からポスト世代へ

ポスト世代におけるシロシイの意味用法の急激な減少、並びに語形そのものの廃用化現象には、人口の急増によるシロシイを知らない他の方言話者の大量流入によって、割合広域に通用している方言形がシロシイに取って代わったり(例えば、スカン、イヤヤネ(厭だ)、シンドイ(つらい)など)、マスメディア、学校教育などによる共通語化と言った外的な要因が大きいことは言うまでもない。しかしながら以下に述べる集団内的な要因も重要である。

ポスト世代の回答の中にはシロシイに代わってシャーシイという語が割合見受けられた。ピーク世代ではシャーラシイと言われるこの語は、「うるさい」「こうるさい」の意味であり、シロシイとは決して重ならない。またシロシイが自分自身に向けた感情であるのに対し、シャーラシイは刺激源そのものに向かってぶつけられた感情であるという点でも異なっている。しかしポスト世代のシャーシイの意味用法は広がっており、ピーク世代のシャーラシイが持つ意味はもちろん、「うっとうしい」、「気持ちが悪い」、「やっかいだ」などピーク世代のシロシイに対応するような意味でも用いられている。つまりピーク世代が

(20) 語の意味・用法のゆれと意味変化

シロシイを乱用したのと同じように、ポスト世代はシャーシイを乱用しているのである。これはやはり、(1)で論じたような社会心理学的要因が働いていると見られる。すなわち、シロシイはもはや古くさく、ポスト世代はそれと違った彼ら独自の表現を求めた結果なのであろう。しかもこの表現は共通語でも東京弁でもなく、博多的なものでなければならない。在来の方言形の意味用法を拡大し、新しい文脈でその語を用いると言うことは、まさにその地域の独自性を保ちながら、かつ自分達の世代をアピールするには都合がいい。

プレ世代からピーク世代へかけてのシロシイの意味変化、またピーク世代からポスト世代へかけてのシャー(ラ)シイの意味変化などの裏には、こうしたいわば言葉の使い手の側の積極的な姿勢が感じられる。

注1 シロシカという「カ語尾」の形も用いられているが、小論では「イ語尾」形のみを扱う。

注2 これについては陣内(1989)に若干詳しい記述がある。

注3 作成した質問文は回答者の年齢によって一部変えた。例えば、未成年に対して〈13〉酒を飲み過ぎて云々は不謹慎であるから、昨日は夜更しして云々や、〈21〉若年層は結婚式の披露宴に出席することもほとんどないと考え、学校に行くこととしたり、〈24〉離婚話に若年層は縁遠いと思ひ、学校の宿題にしたことなどである。

引用文献

- 池上 嘉彦 1978 『意味の世界』 NHK ブックス
国広 哲弥 1986 「語義研究の問題点——多義語を中心として——」『日本語学』vol. 5, no. 9.
国立国語研究所 1964 『現代雑誌90種の用語用字 3 分析』 秀英出版
陣内 正敬 1985 『都市化と方言——福岡市およびその近郊地域——』 文部省科学研究費報告書
——— 1989 「博多方言「しろしい」の意味記述」『九大言語学研究室報告』vol. 10
西尾 寅弥 1972 『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告 44 秀英出版
前田 富祺 1982 「和語の意味変化」『講座 日本語学 4』 明治書院
山口 仲美 1982 「感覚・感情語彙の歴史」『講座 日本語学 4』 明治書院
〔付 記〕 小論で用いたデータを提供して下さったインフォーマントの方々に厚くお礼申し上げます。

——九州大学助教授——
(平成元年 12 月 21 日 受理)